

平安期における美意識の展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 文学史研究会 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 犬塚, 旦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-272

Title	平安期における美意識の展開
Author	犬塚, 旦
Citation	文学史研究. 6 卷, p.10-21.
Issue Date	1957-04
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	文学史研究会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

平安朝における美意識の展開

犬塚 旦

文学の本質についてはいろいろの立場よりする立言がなされてきている。しかし、たとえば勸善懲惡というのも、たゞ、そのかぎり
でなら、それはむしろ倫理道徳の書ともみなされよう。また、現代
文学が真を重要な関心としているといっても、だからそれが文学の
本質であるということには必ずしもならないだろう。時代々々によ
って関心とするところに推移が見られるし、同一作品から読者のう
けとるところもなぐさみや教えやいろいろでありえよう。素材や、
効果の、一面をとらえて、文学を規定してゆくのはいかゞなもの
か。また文学は言語であるといっても、言語は必ずしも文学ではな
い。現に文学における言語の位置をきわめてかく見る説もおこな
われている。もっとも各論者の言語に対する考え方にずれがあるの
で慎重なる吟味検討を要するのであるが、文学は言語そのものとい
うより、言語の匂いゆくすがたであるといわれるとき、より文学の
本質に迫ったものをわたくしなどはうけとる。ひろく人間という立
場から文学を考えてゆくことはもとよりこぼむものではないが、そ
のような上位なものをふりかざして、かえって文学の独自の領土が
あいまいにされるおそれなしとしない。文学が深い人生の根底から

生れ出、人生的根拠をうしなつた文学が浮浅な頹廢的な遊戯、娛樂
に墮すること明らかであつて、人生的基盤を強調することもとより
あやまりでない。文学にはいわれるごとく、たしかになまな人間の
造型といったようなものが考えられよう。こゝになまな人間とはな
まなましく歴史や社会につながり、しかも正しく歴史をつくり出
し、社会をおし進めようとする意欲に生きる人間のいいである。し
かし、文学が諸他の文化に対して独自の存在をほこりうる唯一の根
拠、つまり文学の自律性はむしろその造型力にこそ存するというべ
きではなからうか。このような造型力を判断する基準としては何が
ふさわしいであらうか。近ごろよくいわれる眞実とか迫力とかのこ
とばも、よく考えてみると必ずしも造型的な意味と關係をもつとは
かぎらない。それに比すれば美しい、という用語は本来やはり造型的
な何かを示すことばではなからうか。宗教的・倫理的・認識的・社
会的価値のごときといえども、すべて文学の本質に参加するものと
しては、美的なものの中に綜収しうるといえよう。しかも文学は言
語表象を媒介とする芸術であり、あらゆる心的内容に相わたり、さま
ざまな概念と結び、複雑な思想の形態をとりえて、深い人生体験の
表現に適する。文学が、哲学・歴史と區別しがたい面を有する所以

であろう。哲学や歴史も、具象的表現をふくみ、感動するところがふかければ、文学的と評することができよう。われわれの生命といひ、精神というものと綜合体なのである。而して美はつねに人間としての、完全なかつ根源的な生き方への志向に支えられて、生の構成者としての文学は、その本質において、生の美的意欲に出で、その美的価値によつてこそ人生につながり、人生的価値をなすものといえるのではなからうか。文学を人間の造型という立場から考へ、造型力を判断する基準として美というものを考へてみようとした次第である。かくて「萬葉集」を文学的に観るといふことは、萬葉美とでもいうべきものを発見する以外の何ものでもないということになる。しかも作品の美しさというものは、作者の美意識と密接に結びついているのであって、作品論を深くほりさげてゆくとき、結局作者論にいきつくということがいえるのではなからうか。萬葉の美を産む心の奥の泉を探り求め、その美的構造を完遂せしめている表現の在り方を究明してゆかなくてはならない。而して「萬葉作家の美意識」を「古代人の美意識」にまで拡大して考察し、さらに時代的に展開してゆく相をあきらかにしてゆくべきであろう。わたくしが王朝語を主として、美的語詞の意義究明に力をそよいで来たのも、やがてそれらのことばをてがかりとして美意識のながれを照し出し、そこから作品形成ないし享受の在り方をときあかして来たいと意図してのことであつたのである。従来のもうした語詞に対する解釈には恣意と偏向とがほとんど免れがたいまでにつきまといつていたし、そうした解釈の上に立つて美意識や批評意識などの変化が説かれたりしていることにはなほだ心もとない思いをいだいて来たのである。もとより学問である以上は、客観的基礎の上に立た

平安朝における美意識の展開(犬塚)

なくてはならない。文学研究を科学的ならしめるための一つの試みとして語詞研究をつみかさねて来た次第であつた。まず、文学作品中にあらわれてくる語詞をとりあげてその美的内容を明らかにしたいき方をとつた。そして源氏物語をはじめ、王朝の諸作品を最初にとりあげたのはこれらにはもうした語詞がゆたかにちりばめられているし、手がかりに富むからであり、また、日本文学史上に止めるその古典的地位の高さを思つてのことにはかならない。こうした作業の上に立つ時、例の歌論史研究も一層たしかなものとしてゆくことができるのではなからうか。歌合の研究においても、一々の判詞の詳細なる索引を作り、それぞれ慎重なる意義設定をなし、時代別、個人別に丹念につみかさねてゆく必要がある。われわれの伝統的な文学・芸術論において、文学・芸術の基礎概念がどういふことばで考えられ、それがどういふ意味に用いられているか、どんなことばでどのような価値があらわされ、意識されて来ているか。ひろく諸文献をあさつてみることを要しようし、文学作品、文学・芸術論なはずく久しくその中心的地位を占めていた歌論についてこの問題を考へてみなければならぬ。こうした探究にあつては歌論史などがやはり中心にすえられることになって来ようが、こゝに歌論史というものは、いわゆる歌学史の中から、和歌史の研究や解釈学的研究の歴史を述べることなどははぶき、形式的研究の中からも美意識に関係しないような研究はきりすて、もっぱら和歌の美についての考察の歴史をとりあげてよぶことゝしたい。それは和歌の美の標準や創作意識を論じたものの歴史的記述であつて、日本の美学史の主幹をなすものといふことができるであろう。

以上の考への上に立つて、いわゆる平安朝における美意識の展開

を、文学作品ならびに歌論・歌合の上にあとづけ、当代文学の美的様相をこの面から極力照し出すことを試みてみたいと思う。日本人が古来用いたったことばをてがかりとして美意識の展開をたどるといふ作業は、すでに一部の人々によって手をつけられてはいるが、孤立的断片的になされていて、多く雑然たる調査に終っている傾きがあり、ひろく全体的な視野に立ち、各々が、あるいは時代的関聯の中に、あるいは体系的組織の中に、位置づけられ、秩序づけられるところにはまだはなお至っていない。以下にあらわされてくる種々の語詞については、すでに私見を発表したものもあり、未発表のものもあるが、こゝには煩瑣な考証はふき、行論の必要に応じ、いくらかふれる程度とし、くわしくは別稿を見ていただくこととしたい。あくまで美意識のながれの大綱をつかみとることに主眼をおくので、主流をなさぬものについてはこだわらずに、かなり大胆な試論をなしてみたいと思う。

二

はやく万葉人がどの程度美を意識していたかということは興味ある問題であろうが、すくなくとも後世におけるほど純粋性をもった美的な価値を意識することはかれらにはまだできなかったように思われる。いったい、万葉美を明らかにするにはやはり一首々々、一語一語読み味わって、その美を説明してゆくのが、もっともていねいなゆきかたであろうが、こゝには、しばらく、集中より様々の美に関することばをとり出してゆくことで、当代の美意識をさぐってみることゝしたい。集中、純粹に美を表わすかと思われる文字や語彙はほとんど見あたらないといえよう。美という字は「ミ」の仮名として慣用され、美なるものの意味を表わすために用いられた例は

巻十六・三八二一の美麗物くはれものくらしいのものであり、麗の字も意字として用いられたのは巻十三・三三三〇の麗くはれものくらしいのものである。

(附記) なお、太古の民がまず最も美感を覚えた点は視覚よりもむしろ味覚にあつたらしく、「美」字はすでに殷代の卜辭に見え、羊の大なる物が上古の民の最も甘しとし、ついに転じて視覚から来る美の義を生じたという。(青木正児博士「支那文学思想史」)

「くはし」は「うらぐはし」「かぐはし」「なぐはし」「はなぐはし」「まぐはし」等の語を構成し、美意識を表わすことばかと考えられるが、妙・細・吉・麗などの字を用いている点、美として分化する以前のある快適な価値意識を表わすことばとも見られる。「よし」や「たふとし」(自然の風物景観をも「たふとし」で表わしている)にしてもそういえるのではないか。「うつくし」「うるはし」の語もすでに見えているがこれらはむしろ愛の字をあてるべき意味内容をもち、「うつくし」は親子、夫婦の間に主として使われ、「うるはし」は恋人、友人の間に主として使われている。こうしたなかにあつて、きよし・さやけし・すみ等を貫いて愛用された「清」こそ当代における注目すべき美意識であつたといえようか。美というより当代のことばで「よさ」「たふとさ」という方が一層ふさわしいかもしれないが、純粹な美的価値をも含みつゝ、全面的に万葉人の人生ないし心情の価値をあらわすことばどもの中心にあつて、その中核的価値を特徴づける重要な性格をなすものといえるのではなからうか。もっとも、赤人は「清」にとくにいちじるしいが、人麿・憶良・家持等ともなれば、これではおまえないのであつて、万葉美としてはやはりその有力なる一面を示すものといふことになるけれど、とにかく、明澄にしてけがれなきものを「清」としてお

り、この語はかなり万葉人の生活を象徴し、表現しているところがあるであって、しかも「清」は日本文学史上、万葉と終始し、以後の文学にあっては、万葉におけるほどの勢力をしめない。その他「あはれ」なども無視できないのであり、「山高く河とほしろし」などの崇高美をあらわすと思われる語も見えている。敘上のごとき時代のあとをうけ、平安時代になると美意識をあらわすことばは俄然量を増してくる。以下、その主だったものをとりあげてそれらがどのような美であるかをのべ、その中心的なものどもについて、時代的に展開してゆく相をえがき出してみたい。

万葉時代、親愛を意味した「うるはし」「うつくし」は、この時代になると、それぞれ別途の展開を示すに至る。まず「うるはし」は日本書紀にもすでに「光華明彩」や「光彩」を「ヒカリウルハシ」と訓じているのが見えるが、竹取ではあきらかに光り輝く美としてうけとれ、以後、そうした光華的性格をとどめつゝ、ようやく、唐風な、公的儀禮的な、乱れることのない、きつとした端正美をあらわすようになり、源氏あたりの用例はまさしく端麗の意にとくべきものとなつて、榮華・大鏡に至るまでかわらない。一方、「うつくし」の方は、親愛の意をつたえつゝ、そうした愛情をもつていざなうところの対象の屬性をもさすようになる。そして、多く、弱小な、女性的な対象に用いられ、可憐美ともいふべき性格をおびるに至る。しかも、この語のあらわれるあたりのふんいきは明るく、笑みをもつてわれわれをいざなうようなところがある。これに対し、同じ可憐美でも「らうたし」の方になると、心苦しい、いじらしい思ひをおこさせるようなしめりをおびたところがある。「なつかし」は、弱小な対象にかぎらず、もっとひろい一般的人間関係において

用いられる親愛感・人間愛といったものを示す語であり、対象の外貌的屬性をさす場合には、「なまめかし」といわれる美にきわめて近似してくる。「なまめかし」は「うるはし」と相対しつゝ、王朝美の代表的な一翼をにない、当代における理想美として、きわめて高い地位にある。これは、後世のような、色っぽい意味をもたず、上品な、女性的な、親愛感にみちた、自然な、地味な、そして若々しい人間美であり、「うるはし」の壯嚴・端麗・直線的・男性的にして公的儀禮的なるに對する美である。「うつくし」も「らうたし」も「なつかし」もすべて「なまめかし」系の美として位置づけることができる。かくて、王朝美は「なまめかし」と「うるはし」の二系列に大別してみてゆくこともできよう。即ち、同じく上品な美をあらわすにも、「あて」にはなつかしみがこもっているのに、「け高し」には冷たい近よりがたいところがある。知性美としては「かどくし」「らうくし」などが考えられるが、前者は「うるはし」系に位置して、情味に乏しく、後者は情趣性においてまさり、親愛的傾向を多くとる点において、むしろ「なまめかし」の方に傾くことくうけとれる。而して「らうくし」の方が「かどくし」よりは一段上位の美感をあらわすことばであった。また、平安朝の「清」なるものとしては「清ら」「清げ」があるが、その意味するところはむしろ華麗美であり、「清ら」は光るような美しさ、親しみのいだけられるはなやかさであるのに対して、「清げ」は親しみにくい、ものものしい、雄々しいはなやかさである。「匂ひやか」がなつかしみの感じられるはなやかさ、色つやのよい美しさであるのに、「花やか」には冷い、いかめしいところがある。なお華麗美としては「清ら」「清げ」「匂ひやか」「花やか」のほか、に、「艶」「今めか

し」なども数えることができる。「麗」にはうきやかな技巧的な好色めいたはなやかさが感じられる。たゞ、この語が自然に關して用いられる時、はなやかな趣を去って、さびしさ・凄さ・寒さの中に、しみ入るような優艶さとして感得せられるのである。「今めかし」は当世風であり、目新しさとか趣味性とか理知性といったものがうかがわれて、独自の華麗美となっている。王朝の美意識が以上につきるわけではもとよりない。「おもしろし」「をかし」「あはれ」など、とくに重要なものどもであって、逸されてはならない。「おもしろし」は主として自然と芸術とに用いられている。そして、人の心をたのしませ、なくさめる、味わいの世界のものであり、それが王朝人の生活理想に支えられて、世の常のものと異ってすぐれ、**「あり」**「心ばへあ」といった、卓越性・知性・雅致などを、その構造契機とすることである。「をかし」が明るい情趣を主とするところに、滑稽にもなってくるのに対し、「あはれ」は感動をあらわす意から、しみじみとした情趣をあらわし、さらに悲哀感となってくる。愛情・優美・悲哀の三契機をもってとく人もある。「ものあはれ」となると感動がはずまって知的観照性と調和を保つような傾向がある。さらに、当代における代表的なものとして「みやび」をあげなくてはならない。しかし「みやび」の用例は案外に少ない。「みやび」にみてる時代はかえつて一々にこの語を用いるまでもなかったであろう。「みやび」は、もと、おそらく中国における「風流」の倫理的・文雅の・好色のな全意味性をみずからのうちに内包し、なかならず文雅の・美的方向を中心としつゝ展開したものであろう。そこに風流の日本化をみることができる。「みやび」の様式相も平安朝的な女性的な優美さが中心をなしている。而して

そこには一貫して貴族的好尚が、高貴さへの志向がはたらいっている。王朝時の美意識を体系的に組織づけるごとき、もとより、いまわたくしのなしうるところでない。こゝには、王朝美意識の主だったいくらかをとり出すこととよめねばならぬ。

さて、では、上述の美意識は平安朝期を通じてどのような歴史を織りなしていったであろうか。それぞれはいつ現われ、どのような位置を占め、いかに推移していったのであろうか。まず、万葉期に勢力のあつた、かの「清」の行方を見とどけ、この期に至って、それに代つて支配的となつていった美意識について見てゆくことゝしたい。王朝文学において求め得るものは万葉期とは全然基調を異にする「あはれなるもの」であつたと説かれている。しかし、「清」としては「清ら」「清げ」の語が平安朝に至つて見え出し、しかもきわめて頻用され、重要な美意識となつていくことは注意されてよい。平安朝において有力な地位に立つたものとしては「うるはし」「なまめかし」とともにこの「清ら」「清げ」をあげることができよう。この期において現想的なことをあらわすことばに「めでたし」がある。こうした語をも一のがかりとし、各作品の内部にわけ入つて、各々の美意識がどのように把握され、位置づけられているかを見てゆくことゝしたい。「うるはし」「清ら」「なまめかし」などが高い位置をしめたことはたしかであるが、竹取から宇津保にかけては「うるはし」「清ら」などの光り輝くばかりの華麗さが高く評価されているが、「清ら」は竹取に見える例をもって初見とし、「清げ」の方は管見では大和物語に見える例をはじめとする。「うるはし」はすでに上代以来見えているが、前述のごとく意味はようやくずれてきており、もと愛に発するこの語は竹取に至つて光華の美を

成し、蜻蛉あたりから端嚴のおもむきをとって、宇津保ではこれら愛・光華・端正の三契機が交錯しつゝ、ようやく端正美にその主導的地位をわたすに至り、やがて源氏に至って、端正端嚴がこの語の構成要素中、完全にその王座をしめて、ほとんど全用例をおおうに至り、こゝに「うるはし」の端麗美としての意味を決定づけた観がある。以後、平安朝末期に至るまで、この趨勢はゆるがない。「うるはし」がもっとも高い位置をしめたのは竹取であったといふべく、「清ら」とならんできわめて高い価値性において用いられているのである。ところが、宇津保となると、「清ら」は一七七例〔「清げ」は四六例〕から見出され、「うるはし」の四六例、「なまめかし」の一八例〔「なまめく」一〇例〕に比し、「清ら」まさに全盛の観を呈している。しかもしばしば「めでたし」と並用され、その高い価値性を思わしめるのである。さらに、源氏物語に至って、これらの諸語の關係はきわめて鮮明となり、かわって「なまめかし」がその最高の位置に立つこととなる。「うるはし」に比して「なまめかし」をより好ましとし、これにきわめて高い価値をになわせているのである。そして「清ら」と「なまめかし」とは優劣をつけがたいまでに有力な地位をしめて活躍している。竹取における「清ら」「うるはし」の地位は、源氏物語では完全に「清ら」「なまめかし」に比べてかわられるに至っているのである。では、源氏物語の理想視した美は何であったか。源氏物語中、光源氏の世界では「清ら」的なものが「なまめかし」に拮抗するほどの勢いをふるっているのであるが、次第に「なまめかし」が「清ら」を凌駕するに至っている。宇治の世界では「清ら」は主として匂宮に、「なまめかし」は主として薫にうけつがれてゆくこととなる。別稿にも種々のべておいた

平安朝における美意識の展開(大塚)

ごとく、「清ら」から「なまめかし」へとということばは、王朝における美意識の推移としてみとめられるところであり、それは源氏物語一篇の中にも看取しうる傾向なのである。なお、「清ら」は源氏型、「清げ」は頭中将型として大別することができ、「清げ」は「清ら」よりひくゝ位置づけられている。「なつかし」「らうたし」「うつくし」等は「なまめかし」のもとにあって愛の姿として見るべきもの。「花やか」「匂ひやか」などはさして高い位置をみとめることはできない。「かどくし」はかなり重視されるべきも、「今めかし」はさらに高く、「らうくし」に至っては時代の理想美の中に座をしめるものといふことができるであらう。さきに「らうくし」が「なまめかし」的な傾向をとることをのべたが、その知的營為が時代規準に向って發揮されてゆく時、この時代の理想美に、結果として近づいてゆくことにもなりうるといふまでで、やはり「らうくし」の志向目標としての「なまめかし」にこそ時代の理想美を思ふべきであらう。本稿では焦点を「うるはし」「清ら」「なまめかし」にすえて、この時代の美意識の展開をながめてみようとした。さらにこれら以外の美意識についても丹念にあとづけ、位置づける作業をつかみかさねてゆかなくてはなるまい。とにかく、古代日本にあっては、清さ・さやかさの美のごときにしても、崇高の気分をひそませた優美さを思わせるのであるが、時代がくだるにつれて、優美の方が崇高を庄するけい濃厚になることはみとめられるところであらう。而して、平安朝においては、優美のうちにあつても、「清ら」「うるはし」的なものから「清ら」「なまめかし」的なものへと推移し、さらに「清ら」から「なまめかし」へと理想視される美の傾向性においてその重心をうつしつゝすすんでゆく過程を看取すること

をえたかと思う。王朝美意識の推移は大きく「清ら」から「なまめかし」へと捉えることができるのであろうと思う。

三

つぎに歌論・歌合に目を転じよう。歌論の本質的研究としては心を中心とするもの、詞を中心とするもの、姿を中心とするもの、調を中心とするもの、美的理念を中心とするものなどをあげることができよう。本稿ではこのうち美的理念を主にみてゆくこととした。記紀あるいは万葉における歌論意識としては歌の分類意識が注目せられよう。また家持が防人たちの歌を集めた時、拙劣な歌は削って載せなかったとあり、作品に対する批評意識がみとめられるが、歌論の萌芽状態をみるというにとゞまる。これらの歌論意識が中国渡来の詩学に刺戟されて、わが国最古の歌論書といふべき「歌経標式」が現われた。この書は全く中国詩学の模倣といふべく、詩論による立言がなされているにすぎない。歌体論の先蹤としては注目すべきも、内容的にはさして価値をみとめることはできない。ついで平安時代に入つて、まず空海は中国詩論を総合して「文鏡秘府論」「文筆眼心抄」を著わし、歌論の発達に影響したと思われる。われわれはまずそれを古今和歌集序文にみるることができるのである。歌論としてよくまとまっております、中国詩論の影響模倣が見られるが、その内容はかなり日本化しており、わが評論史上最古の最も意義深い文献といわなければならぬ。心詞論を中心としているが、ことに六歌仙評における秀歌論は重要なものであり、こゝには「ささま」や「まこと」ということばを用いて歌の本質を考へている。貫之は「ささま」において歌体を意味させているほか、心・詞に對し、歌を歌たらしめる第三的な内在的意味ともいふべきものをこの

「ささま」によって意識していたと思われる。そこにはのちの公任における「姿」を思わせるものがあるのである。古今序においてはこの「ささま」とともに「まこと」ということが重視せられている。ついで壬生忠岑に「和歌体十種」がある。十体のうちもつとも歌論的価値あるものは高情体であつて、幽玄の歴史において注目すべきものである。忠岑自身の説明によれば、高情体とは、詞凡流と雖も義幽玄に入るものである。しかし幽玄体即高情体とみるのはあたらぬいであらう。忠岑の幽玄はもちろん高情をも含むが、高情のみのいではないのであつて、かなり広範囲に用いられる幽玄である。谷山教授はその著「幽玄の研究」において「忠岑の幽玄は広く高情などを含み得るものであり、深遠微妙にして測りがたい情趣をあらはすものであり、それは更に早くも詞にあらはれぬ余情の義たらんとする傾向を示してゐる」とのべられている。十体中の余情体と深い関係のあることが察せられる。余情の問題はすでに古今集序にとりあげられているが、業平を評して「その心あまりて言葉たらず」とあつて、意想がありあまつて表現が不足しているといふのでよい意味に用いられているとはいえない。ところが、忠岑十体に至つてはとにかく一体としてみとめられているのであつて注目せられてよい。たゞ、こゝにいう余情は簡単な表現にたくさんの内容がこめられていくといふことであるらしく、中世における余情ほどの深さは見出せない。幽玄にしても忠岑のそれは中国的なそれから日本の幽玄への展開を見せているところに重要な意義をしめ、やがて基俊的幽玄となり、さらに俊成的幽玄へと発展してゆくことになるのであつて、とにかく中世歌論の先蹤となりその基礎を作つた点、歌論史上特筆すべきことであらう。さて忠岑歌論のあとをうけて注目すべ

き歌論をなしたのは藤原公任である。余情と姿との説をもって中世歌論の素地をきすいた公任歌論こそはまさに平安時代歌論の重要な代表者とみとむべきものであろう。以下、新撰髓腦および和歌九品により、しばらく公任の歌論をうかゞうことゝしたい。新撰髓腦における公任歌論の主要なる命題は心と姿とであった。古今序の心が主として感情内容としてのそれであったのに対し、公任は心の感情的内容と知的内容とを区別するに至っているし、また姿の論は古今序の見解を一步進めているといえよう。姿は詞よりも歌の形象により即したものと見える。和歌九品の「あまりの心」はこの姿と深い関係があると思われる。公任によって「すぐれたり」とされる歌は「心ふかく姿きよげにて、心にをかきしき所ある」歌である。さらに、「一筋にすぐよかに」よめといい、「うちきよきよげに故ありて」とも見え、これらは和歌九品上中に「はどうるはしく」とあるのともにも、いずれも注意すべきことばでもあって、公任の「すぐれた歌」に対する見解をあざやかに特色づけているものといえよう。従来「きよげ」の美的内容についてはあまり説かれていない。さきにもすこしくふれたが、清げ・すぐよか等いずれも「うるはし」系に属して「なまめかし」系に対する語詞どもであり、「ゆゑ」また「清げ」ときわめて近い関係にある語である。純一平明にしてごた／＼したところのない、きつとしてとゞのつた一種の華麗さ、それが情意の深さにつゞまれ、着想上の興趣にきゞえられ、一すじにつよく確かによみすえられて、歌ときこえること（韻律性）、それをすぐれた歌の要件としているのである。また「めづらし」ということを強調し、「ふるく人のよめる詞をふしにしたるわろし。一ふしにてもめづらしきことばを、よみいでむと思ふべし」とものべてい

平安朝における美意識の展開（大塚）

る。そして「心姿相具のもの」「心深きもの」「姿きよげなるもの」の三段階を考えて心姿相具を理想としているのである。さらに和歌九品では、和歌を九品に分けて、価値の段階を示し、その上品上に「これはことばたへにしてあまりの心さへある也」とあり、上中には「はどうるはしく餘の心ある也」とあって、公任歌論における最高理想が「あまりの心」であったことがわかる。しかし公任はその「あまりの心」がどのようなものであるかについてはなんらのべていない。下下に「詞とゞこほりてをかきしき所なき也」といっているのに対して、中上には「心詞とゞこほらずしておもしろき也」といっている。「をかし」も「おもしろし」も知巧的な趣向のかった点をいっているであろうが、下上の「一ふしある」歌というのもおなじく趣向歌をさしていよう。忠岑十休中の比興体につながるものであろう。公任自身の歌風にもこのような「一ふしある」歌が相当に見られることが注目される。とにかく、公任はこうした歌の上にも、さらに上品の三つの段階をすえているのである。上品下は「心ふかからねどおもしろき所ある」歌である。この段階では中品上に要求せられた以上のおもしろさの見出さるべきこというまでもあるまい。しかも「心ふかからねど」といういい方からすれば、この段階より上位のものは「心深く」あるということが予想されるであろう。而して上品中・上にはいずれにも「あまりの心」という意識がとかれているのであって、公任における「深き心」は「あまりの心」であったとの論がみちびかれるのであるが、この点いかゞであろうか。公任は心と詞とでは現わしきれぬものを姿においてみとめたと考えられ、かれの「あまりの心」はこの姿の自覚のうちに宿ったと思われるのである。かれのいう姿とは心・詞をこえ、内容・形

式を超えた、いわば文学性になったことばの様相といえるであろう。したがって「ふかき心」と「あまりの心」とには本質的相関性が見とめられるとはいうものゝ、両者たゞちにおなじなのではなく、深き「心」と妙なる「詞」によって形成されるきよげなる「姿」の中にこそ宿りくることを期待しうるもの、つまり歌をして真にそしてすぐれて歌たらしめ、歌ときこえしめる深き根源的な何か、歌の精神とでも称すべき何か、それが「あまりの心」であつたとすべきではなからうか。かれの餘情論は中世の幽玄有心論の萌芽を示しているといえるが、もとより、古今風を理想とした公任の餘情が、新古今風の幽玄ほどの餘情主義になつていないことはいうまでもあるまい。かれの歌論における「餘情」と「姿」の説の重視さるべきことはもとよりであるが、その秀歌の要件として、「うるはし」「清げ」などの語の見えることも見おとされてはならない。さきに物語文学等に見られた傾向性と対比して興味ぶかい対照をなしていることに気づくであろう。かれの「なまめかし」「清ら」に対し、これにあつては「うるはし」「清げ」が重視せられていたのであつて、そこに公任歌論の一つの特色を見出すのである。

以下、平安朝期、俊成にゆきつくまでの歌論思想を歌合を主として概観しておくことゝしたい。歌合は判詞による批評意識をこそ前提として成立しているものといふべく、そこに歌合の歌論性を見とめることができよう。歌合判詞にあらわれた批評意識の美的内容の追求がなされねばならぬ。以下、判詞にあらわれた批評意識の展開の相をたどることゝしよう。本稿の意図にそつて判詞の歌論性を見うるようなもののみ順次とりあげてゆくことゝする。亭子院歌合には「よし」「をかし」など見え、それらは左右いずれも「よし」あ

るいは「をかし」とて持となつてはいるが、負のばあいは「古めきたり」「あぢきなし」という理由によつてはいる。歌論性を明らかに見出しうるようになったのは天徳内裏歌合からである。「をかし」の故に勝とされているもの五、「難」がないというので勝になつてはいる。左右ともに「をかし」のばあひ、持ともなり、一方にさらに「詞清げ」が加はることによつて、そちらが勝になつたりしている。「をかし」はやはり秀歌たるの要件として考えられていたのである。十三番の判詞によつて、「興あ」といふことが「をかし」であることをしりうる。「難」がないとは非難すべき点がないというので、歌合にあつては一つの有利な条件であつた。俊成も歌合の歌は、姿を第一として難をなくするということをいっている。「清げ」の語は二度用いられ、「歌がら」「詞」に関していわれている。「艶」も一回見え藤の歌に関して用いられているが、後世、俊成定家時代に頻用されるに至つたこの美的評語も、こゝではまだ理念化してはいない。その他、「頗る情あり。よりに勝となす」とか「左右ノ歌、共ニモチ優ナリ。勝劣を定メ申スコト能ハズ」とかと、「情」「優」などの語もつかわれてはいるのである。「そらごと」である故をもつて負とされていることも注意される。賀陽院水閣歌合もやはり「をかし」の故に勝とされているし、「いまいまし」というので負になつてはいる。高陽院七首歌合は経信が判者である。核一番では「うるはし」詠まれてはいる左歌を勝としている。規範を伝統の中に求め端麗なものを好んだ経信の理想に近い歌でもあつたらう。後鳥羽院御口伝には経信を評して「ことにたけもあり。うるはしくてしかも心巧みに見ゆ」とのべられている。雪一番は左歌「をかし」く、右

歌「うるはし」く、持とされている。経信が重んじたのはまさに「うるはし」と「をかし」とであったといえよう。「をかし」は六回（うち一回は「をかしだち」）用いられ、勝三、持二となっている。持のもう一回は桜七番で、わが子俊頼の歌のばあいであることは注意を要しよう。左「心ばへをかし」くあるに對し、右俊頼の歌は「きららかに詠まれたるやう」だからとして持としているものである。しかしわれわれはこの歌にむしろ若い俊頼の一つの革新的な試みをこそ見出すのではなからうか。それはとにかく、「をかし」の重視されていること右のごとくである。ほかに「なびらか」「歌めき」である故をもって勝とされているし、「難」がないということ、「めづらし」「心深き」など見えるが、「めづらし」と、めづらしげはないが「難」もないというのと持としている。「心深」いといわれている歌も本歌に見られる近景としての情趣をなくしている点の欠陥の故に、他方の「をかしう」詠まれていた歌に負けているのであって、「心深し」自体は重視していることを思わせるのである。以上、経信は、伝統的なるもの、典型的なるものゝ中に美をみとめており、その歌論はほとんど公任から出るところはないということを見とゞけたかと思う。つぎに左近權中将俊忠朝臣家歌合により判者俊頼の歌論をうかゞつてみることにしたい。俊頼は「節」というものを重んじている。着想や構想や表現などの創意ある格別の興趣をいうのであって、これは平安朝期より鎌倉期へかけて歌論上の一目標であった。ことに俊頼は、金葉集撰進のさい、斬新な、個性的なものを重んじており、歌論でも「節」を重視している。さきに公任にも「ふし」への重視は見られたところであるし、のちの定家が毎月抄に「一節ある様」として十体の一にあげているのも、こうした思潮

平安朝における美意識の展開（大塚）

をうけたものといえよう。後年かれがよく嫌忌し否定している「古めかしさ」「古ごと」はやはり難点としてあげられている。新しい趣向をたてることよりする必然であろう。それから「すべらかにも聞え」ないということを二度いつているが、文字続きのわるい、風姿のととのわぬものはやはり好ましくないものとして聞えている。俊頼隨腦に「大方歌のよしといふは、心を先としてめづらしき節を求め、詞を飾り詠むべきなり。心あれど詞飾らねば、歌おもてめでたしとも聞えず。詞飾りたれどもさせる節なければよしとも聞えず。めでたき節あれど優なる心詞無ければまたわるし」といつている思想はすでにこの壮年期に培われていたのである。優なる美を構成する条件として、俊頼はとくに詞の続きがらということを強調している。同じく俊頼隨腦に、「よく続けつればとがとも聞えず。悪しう続けつればとがとも聞え、悪しう続けつれば、花桜といふも、照る月といふも聞きにくくこそ覺ゆれ」とものべられているところである。これは公任の思想にもつながるものであり、「しらべ」を重んずることであった。その他「をかし」が五回、「面白し」が一回用いられている。「をかし」と評された歌は勝二、負二、持一となっている。持となつてゐるのはもう一方の歌が「珍らしき節」はみとめられながら「文字続きなどのすべらかにも聞え」ないのに對し、「文字続きなどのをかし」きをもって同じほどにやとされているもの。「珍らし」は十分「をかし」に拮抗しうるものとなつてゐる。負となつてゐるのは、一は万葉にあることを詠んでいる方の歌を「恐しき」に勝とし、「いとをかしう詠まれて」いる歌を負としているもの。一は「おかしう思ひよられ」た歌だが、「古屋の」という詞が「破れたる心地」がするといつて、負とされているもので語感を重んじて

いる点興味ぶかい。「面白し」と評された歌は「古めかし」の故に負となっている。俊頼が重んじたのは「珍らしき節」「すべらかさ」などにおいてとくに著しい。さらに俊頼髓腦には「けだかく面白き、一のこととすべし」とあることも附記しておきたい。俊頼の思想はその歌作の実際はとにかく、歌論としては公任の見解とさしてかわるものとも思えない。曾根好忠のきりひらいた新風を発展せしめて、歌を現実主義的な、平明なものとしたかれの功績に比し、歌論としてはなぜかとくに新しい風を鼓吹したとまでは思われぬのである。たゞ、公任歌論のうち、「ふし」をつよくとりあげ、「珍らしき」「すべらかさ」を強調しているあたりに、かれ以前の風潮に対する一の特色を見るものといえよう。つぎに当時においてこの俊頼の対抗者であった基俊の歌論思想を、元永元年内大臣家歌合を主ながかりとしてさぐってみることにしたい。この歌合は俊頼、基俊の二人が判者となつて、各一首の歌を二人して別々に判をしており、歌合史上、歌論史上特別な形態と内容をもつものとして注目せられるのである。この二人は思想的にかなり対蹠的であつた。天成の歌人と博覧の学者とによるこの歌合の判はまことに面白いものがある。俊頼の方はさきの使忠朝臣家歌合から後年の俊頼髓腦に至る発展の系路を示しているし、基俊はあくまで典雅な伝統的思想を守ろうとしている。前者の主観的であり享受に重きをおく立場に対し、後者は客観的な基準に立っておいてゆくこととして、この歌合には基俊の方に重点をおいてみてゆくことにしたい。この歌合にも、単に古いものを無条件で信することのできなかつた俊頼の思想がうかがわれる。「珍らし」「すべらかさ」「なだらか」ということがとくに尊重され、「古きこと」「古り」たること「古めかし」が退け

られている。「をかし」も重視されてをり、六回ほど用いられているが、勝は二回である。左右とも「をかし」とされているのが二あるが、一はさらに「文字づかひなど優な」ることが加わつてその方が勝っており、一は去るべき詞がつかわれていた故に、そちらが負となつている。「をかし」と評されて負になつている歌が一あるが、「なたらかにもいとをかしくこそ」と評されながら「聞調れ」た詞の故に、他方の「聞えかぬる心地」する文字の用いられた歌の方を勝にしているのである。常に新しい興趣を求めつゝ作歌した俊頼の面目をうかゞわせるものであらう。そのほか「歌酒巧み」なることと、「面白し」ということが重んぜられている。しかし一番の判詞にも見えるごとく、「巧みに面白」い歌であっても、他方の「歌めきた」る歌に負としているはあいもあるものであつて、珍らしい節を求め、詞を飾ることを主張した俊頼であつてもこの歌の唐突な詠み出しには費しえなかつたものであらう。以上、俊頼の立場は使忠朝臣家歌合の判詞の思想の線上を順当に辿つていけるものといえよう。これに対し、基俊の立場はまた対蹠的に鮮明である。十一番を見てもみよう。二人とも右を勝としており、両者の判定は同じではあるが、俊頼は「珍らしからねどすべらかに聞ゆ」といひ、基俊の方は「いひ調れてをかし」として勝にしている。判定の過程には大きな運庭があるのである。俊頼にとっては「珍らしき」節と「すべらかさ」とは車の両輪のごとく大切であつたが、こゝは後者をとつたのである。しかし基俊の方は「いひ調れて」いる故によしとしているのである。ほかに「いひ調れたるやりに侍れば、勝りたり」ともいひ、文字続きが「聞き調れぬやりに」思われ

ものも二ある。そのばあいも「をかし」ということがいずれにも指摘せられている。「をかし」の語は七回用いられ、「をかし」と評された歌はすべて勝となっていることは注目されよう。ほかには「歌めく」という語も五回ほど見え、うち四回は勝っており、一回は負になっている。「姿歌めきて」あるけれども「詠まほし」からぬ詞が用いられているのに対し、他は「品すぐれ」ぬが、「文字続き悪しくも」ないからと勝とされているのである。基俊は「なだらか」ということも優位においているが、(恋十二番)俊頼の方は平凡な「なだらかさ」より、いくらかの難はあっても「珍しき節」あるものを好尚したようである。そのほか「優」「たをやか」「心あり」「題の心深し」ということも重んじているし、「あはれに心苦し」き歌と「いとほし」き歌とを有している。「優」のごとき、この基俊から歌学的教養を得た俊成の判詞にはこの評語が非常に多く用いられているのである。「心あり」なども注意されてよいであろう。ともあれ、基俊の評語は伝統歌学を忠実に学んだところがうかがわれるのである。「をかし」がとくに重視され、むしろ「いひ馴れて」いる方に好尚を示し、「歌めき」あることがのぞまれている。俊頼と基俊はまことに興味ぶかい対照をなしているものといえよう。歌壇におけるこの両者の対抗ののち、ついで六条家対俊成、定家の対抗があり、それよりさらに新たな対抗をはらみつゝ、展開してゆくわけであるが、うち、六条家の歌学はとかく閑却されがちであるけれども、その歌論には注目すべきものがあるのである。本稿では顕季をもとりあげ、俊成をもとりあげるべく、はじめは心づもりをしていたのであるが、すでに紙幅もかなりとっているので、以下、稿を分けて論述することゝしたい。数多い判詞を駆使した俊成をみることに

平安朝における美意識の展開(犬塚)

は、平安朝文学にあらわれた美意識の推移や系譜といったものさならなる明確化、あるいはその全貌の秩序づけに大いに資するところあろうと考えている。

四

以上、平安朝の美意識を、文学作品と歌論・歌合判詞とに分つてみてきた。文学作品の方では「清ら」から「なまめかし」へと展開を見せ、歌論・歌合にあっては公任歌論がなんといっても卓越した位置をしめ、以下、平安末期まで、そのある面が強調されるといったくらいのもので、すべてはすでに公任においてとりあげられたものばかりというも過言ではないであろう。この両者をたどってゆく時、やがてわれわれは俊成・定家という大きな存在にゆきあたる。和歌あるいは歌論の面からのみ、俊成・定家にアプローチすることは偏しており、先行文学に対する全面的理解の上に立たずしてはその本質解明はとうてい望めぬであろう。なかんずく、源氏物語と公任とが大きくクロゾアツプされてくることゝなる。美意識の追求はもとより文学作品そのものをあらしめ、なりたくしめていられるものとしてのそれにまでほり下げられ、具体化されなくてはならないであろう。いまはたゞ美意識をあらわす語詞をてがかりとし、さまざまな美意識をそれぞれ他の美意識との関係において、つとめてひろくとらえ、それを時代的な関聯の中に浮びあがらせてみようとした。今後、さらに精細なる研究をつみ、不備を補い、充実させてゆきたいものと念じている次第である。

*

*

*